秋晴れ

いつの頃からだったか―――
僕の五感が
現(うつつ)なるものを素通りするになったのは

絶望、そして歓喜―――
それらはみな、五感とは関わりなく
別の場所で孵化しては消滅していた

傍らにまどろむ猫は
あたかも守り神のように
敷き延べられた布の先を向いている

僕は立ち上がり扉を開く
おお、秋晴れだ
あらゆる事物の中へと沁み透る光の散らばり

澄明な日差し
そして影の淡さ
すべてが大気に薄められてゆく穏やかさ

それとは対照的に
鳥たちの眼差しの先には
濃赤色に色づき始めた木々の実

一足ごとに浮き立つ
時折、不規則に咳き込む鼓動を超えて
白く輝く霞のような薄い雲

何を生きてきた、ではなく

ただ、生きてきた、ということに
ああ、輝かしい涙が僕を潤してゆく

(2009.11.7)